

外国語としての日本語教育

—英語教育との共通点と相違点—

広島大学大学院 岡 秀 夫

I はじめに

まず最初に、この夏の2つの日本語コースについて、簡単に紹介しておきたい。そのひとつは、アメリカの高校・大学生17名からなるグループで、レベルは、2名の日本語学習経験者を除いては、全員が初心者であった。期間は2週間の集中訓練で、教材には、参考文献②のものを使用した。もうひとつの方は、広島などに0～数年在住している外国人成人10名余り（主として英語を母国語とする者）を対象とした2週間ばかりのもので、毎日3時間ずつ行った。日本滞在年数の違いがかなりあったため、能力の差もあったが、一応、最大公約数的に中級の下とみなし、教材として④を選択した。学習の主要目的は、両方のコースともに会話の力を育成することであったが、前者では日本文化へのオリエンテーションを含み、後者では読みが多少入って来た。このような2つの経験から痛感したことは、ただ日本語の母国語話者 (native speaker) であるということだけでは十分な教授はできないということである。すなわち、教授・学習の対象となる日本語を、学習者の立場から十分理解し、教えることに理解がなければならない。そこで、外国語としての日本語教育を少しでも体系的にとらえるために、次の3点から考察を試みたい。

II 教 材

教材面では、言語学的にもL₁とL₂の比較が重要で、それによって教材の選択や配列、学習者の困難点の予測などが可能となる。ここでは便宜上、英語話者に限定すると、音声面において、日本語では母音で終る音節構造—開音節 (open syllable) —をとるのに対して、英語では子音の独立性から、その比重が大きく、CVの後にさらに子音を伴ったCVC閉音節という形をとる。それ故、単音節語の多い英語では、当然母音を強調し、その強さによってアクセントをつけ、強弱アクセントとなる。それに対して、日本語では、音節が点の連続として表われ、高低アクセント (pitch accent) に傾る結果となる。音声面に限れば、学習の上で問題をきたすことは比較的少ないが、初心者に対しては、拗音便「ん」と促音便「っ」への注意が必要である。また、ローマ字に対して英語読みを与えるという誤りがあり、ラ行を伝統的に 'r' で表わすため不自然に響き、'l' で表記した方が適切かと思われる。

つぎに、文法面に目を向けて見ると、ここに種々の問題点が山積みしていると言えよう。思考様式を最も端的に反映するものである語順 (word-order) は、日英語間で大きく異なり、SVOというような表現形式に対して、日本語では主語が省略されることが多く、動詞が文末に来る。単語のレベルで、品詞の用法に関して、名詞は冠詞がなく、数の概念は普通表わされない。英語における格、および格変化は、日本語では助詞 (particles, postpositions) によって表わされる。日本語の助詞は大きく2つに分けられ、第1は子音動詞 (consonant conjugation) と呼ばれるグループであり、第2は母音動詞 (vowel conjugation) である。子音動詞は、いわゆる5段活用に当たり、たとえば「読む、書く」などが入る。これは、yom-anai, yom-imasu というように、'yom' までが語幹 (basic stem) で、最後の 'u' が落ちるので 'u-dropping conjugation' とも呼ばれる。他方、母音動詞は上1段・下1段活用を含み、「食べる」が tabe-nai のように最後の 'ru' が落ちて活用するので、'ru-dropping conjugation' とも呼ばれる。これらの2つのグループは、種々

の変化型において異った性格を有し、結合型 (combining stem) を作るのに、母音動詞は 'ru' をとって 'tabe'、子音動詞は語幹に 'i' をつけて 'yom+i' のごとくなる。この結合形は、「—ます、ません、ました」という時制・否定を表わす接尾辞と結合する上で、不可欠なものとなる。その他にも文法面では問題点が多く、今後要求されることは、いわゆる国文法ではなく、外国人学習者のための日本語文法の確立であろう。

敬語表現に関しては、levels of formality/ politeness として4段階に分類される。すなわち、rude, abrupt, normal-polite, very polite の4段階で、「見る、食べる」が abrupt で、「見ます、食べます」が normal-polite のレベルに相当する。一般のテキストは、この後者のレベルに統一されている。敬語表現を日英語間で比較すると、英語で仮定法などを多く用いるのに対し、日本語では接頭語の「お-」をつけたり、「いる—いらっしゃる」のごとく、語彙が大きく変化する特徴が見られ、上級学習者にも問題となる点である。それは単なることばだけの問題というよりも、社会文化的様相が強く、発想とも関連して来る。たとえば、日常しばしば用いられる「すみません、つまらないものですが」をそのまま英語に訳したら誤解を生じ、また、「いただきます」のように英語ではそれに相当する表現が存在しない場合など、注意を払わねばならない。最後に、書きことばの問題は、ひらがな、カタカナに限定すれば、比較的短期間に習得できようが、漢字に関しては、その数・書き順・読み方・意味などにおいて、忍耐と年月を要するものと言わざるをえない。

III 教授法

教師の力が最も試されるのが、教材研究と結びついた教授法においてである。使用した参考文献④のテキストは、アメリカ的な audio-lingual の教授原理に基づいたもので、全体として構成はまとまりを持ち、その内容には実際の指導に対する配慮がうかがわれる。下の表に示すごとく、各課は9項目から構成され、とりわけ、7番目の Drills は種々豊富な pattern practice を含み、多くのページ数がさかれている。そのような教材を用いて行った1時間当りの指導過程の概略が、右側の表のごとくである。

教材の構成	指導過程
1. Presentation	1. Review
2. Dialog	2. Presentation of new material
3. Pattern Sentences	situation
5. Vocabulary	vocabulary
6. Kanji	grammatical items
7. Drills	3. Listening and reading of the dialog
8. Exercises	4. Drills (pattern practice)
9. Situational Conversation	5. Communication practice

それぞれの指導過程の比率は、全体3時間で途中休憩をはさみ、大体30分ずつ位の割合であった。最初の復習では、あいさつ的なものや生徒個人個人に対する質問の中に、前の課の要点を融合させ、自然な会話の形に発展させることに努めた。つぎの新教材の提示は、テープレコーダーや絵、写真、フラッシュ・カードなどの視聴覚教具を活用し、多角的にアプローチし、自然な導入を大切にしたい。そうすることによって、語彙は場面の中で生き生きとしたものとなり、文法事項では、必要に応じて英語による説明を与えた。いわゆる direct method で L₁ の使用を完全に排斥したり、習慣形成のためにドリルのみを強調しすぎて、意味もわからずに機械的な訓練を与えるより、その方が効果的であろうと思われる。第3番目の項目と第4のドリルは、逆になることも可能であるが、この場

合、途中で休憩があったため、休憩あけの元気が回復した所でドリルを行うのが適当と考えて、このような手順をとった。そこで、まず、準備しておいたテープを聞かせ、その内容に関するQ & Aを日本語でやり、読みの練習へ進んだ。ダイアログ教材の価値は場面であり、そこにおけるS → Qであると考え、丸暗記は促さなかった。ドリルはテキストに非常に多量に盛られていたため、有益と思われるものを取捨選択したり、学習者の関心に合わせて変えたりした。というのは、外国語学習で大切なことは、単調で機械的な操作ではなく、実際の場面に基づいて、自分の意志を表現することであるという認識から、テキストにあるドリルをすべてカバーするのに授業時間の大半をとられるより、コミュニケーションへの橋渡しとしてのcommunication practiceを重視したわけである。このcommunication practiceの必要性は、英語教育においても近年盛んに叫ばれており、このテキストの序論にも mim-mem の段階を越えて、選択(selection)の段階へ進むべきことが述べられている。しかし、実際のテキストでは、そのための装備が不十分で、補正せざるをえなかった。

上のような指導過程をスムーズに展開し、効果的に運ぶためには、授業内容に変化を持たせ、学習者の興味を持続させ、参加を促すようにいろいろと工夫をこらすことが大切である。つまり、それによって、学習者の learning burden を軽減し、自然で楽しい活動とすることである。その中でもとりわけ重要なことは、教師がcommunication practiceの重要性を認識して、指導過程全体をひとつの有機的な形にまとめ、コミュニケーションへ至る道程に、しっかりとしたレールをしいてやることではないだろうか。

N 学 習 者

教材・教授法とともに主要な要因をなす学習者について、その特質を調べて行くと、日本人の英語学習者と比較して、大きく異なる点がいくつか見い出される。まず、動機づけ(motivation)において、日本の生徒が cultural interest または school requirements から英語を学習している現状と、practical needsを持った外国人学習者との違いである。このことは、外国語の学習環境として、そのことばが話されている土地が、この上ない有利な条件となって働くことを示している。

特に日本の生徒との違いをはっきりと認識させられたのは、学習態度(attitude)の面である。日本の生徒が、大体において、受身的・消極的であるのに対して、彼らは、一般に能動的・積極的な学習態度を備えている。そして、日本の生徒が画一的な授業に慣れ、従属的に学習に取り組むのに対し、彼らは、グループ活動などの独立的な形を好み、自分の参加を求める。それ故、assistants が得られれば、ドリルや communication practice を小グループで行えば、授業に変化を与えることになり、1人1人の参加の機会も増し、雰囲気もやわらぐ。また、最後に対話を act-outしたり、communication practice のひとつの形態として、場面を設定して、会話を準備させ、発表させたりすることも比較的容易に実施でき、言語活動という観点からも効果的である。このような著しい学習態度の違いは、教育的な要因のみならず、社会文化的な素地からの影響も強いと思われる。彼らにとっては、自由に活動し、自分で考え、発見し、自分の意見を形成することは当然と受けとられる。この違いを比較検討する時、外国語学習—知識や規則の暗記ではなく、生きたことばとしての活動—にとって、どちらが望ましい学習態度であるかは明らかであろう。日本人の英会話力の乏しさも、その根源は、このような社会文化的、および教育的な所に位置しているのではあるまいか。

以前、何らかの外国語を学習したという経験が、この日本語学習に対して、少しでも助けとなったかを探ろうと試みた。外国語の学習経験とテストの結果とは、余り明確な対応は示さなかったが、

特定の者を除いた場合、ある程度の有意性は認められる。特に、外国語の学習経験が乏しく、余り出来なかった生徒の場合、文法概念の把握、外国語学習についての基本的認識などにおいて、マイナス面が見られた。それ故、以前の外国語学習経験が、その成功を完全に予測するものではないとしても、何らかの外国語をある程度までやったことは、第2・第3の外国語を学ぶ上で、プラスになると言えよう。

V おわりに

以上、教材・教授法・学習者という3つの観点から、外国語としての日本語教育を考察して来た。英語教育と、比較すると対象となる言語(target language)こそ違うものの、外国語教育という大きな視点から見た場合、特に、教授法において共通点がかなり多い。その基本的な教授原理は、外国語教育としての普遍性があり、対象言語が異っても適用が可能である。また、日本語教育から英語教育へ示唆となる点—特に学習者要因に関して—も少なからず、英語教育における今後の改善が期待される。そして、我々が英語を教える際に、第2章で扱ったように、日本語の構造を英語との比較に基づいて熟知していることは、英語の教授にとって有益であることは言うまでもない。

REFERENCES

1. Bleiler, Everett F. Basic Japanese Grammar. C. E. Tuttle Co., 1963.
2. E. I. L. Hiroshima. Drill for Basic Japanese. 1974.
3. Miura, Akira. "Some Techniques of Teaching Japanese," 『語学教育』 No. 297-8, 1971.
4. Young, John and Kimiko Nakajima. Learn Japanese: College Text. Vol. II, The Univ. Press of Hawaii, 1967.
5. Yukihiro, Taizo. "Recent Trends in Teaching Japanese as a Second Language in the United States," 『語学教育』 No. 301, 1972.
6. 駒井 明. 「外国語としての日本語学習における問題点」 『語学教育』 No. 299, 1972.
7. 九鬼 博. 「外国語としての日本語教育」 『英語展望』 No. 47, 1974.
8. 徳田 政信. 「外国語学習としての日本語の問題点」 『現代英語教育』 9月号, 1971.